

事例 3

「不登校」が予測される中学生への予防的な指導援助の事例

1. 予測した問題行動 不登校

2. 対象 中学校 3年 女子 (S子)

3. 問題行動予測の動機

- ・ 学級内に親しい友人がなく、周囲から話しかけられても明確に反応できず、黙ってしまう。
- ・ 二学期当初、頭痛、腹痛を理由にして、遅刻すれすれに登校することが時々あった。

4. 資料

このままでは学級に溶け込めず、何か問題行動を起こすに至るのではないかと考え、急いで既存の資料等から情報の収集をした。

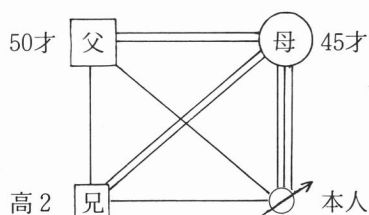
(1) 指導要録、通知表から

○ 本人の知的発達度

- ・ 知能 S S53 (教研式, 中学 3年時)
- ・ 学業成績
順位～中間 (187番), 期末 (252番)
評定～数学 3, 保体 1, その他 2
- ・ 欠席の状況
中学 2年 8日 (理由 かせ)
中学 3年 3日 (理由 かせ, 腹痛)

(2) 家庭との連絡から

○ 家族構成と家族システム



○ 本人への養育態度

- ・ 父-兄と比べると甘く、しかることが少なかった。
- ・ 母-本人は、生まれて間もなく肺炎を起して入院したことがあり、過保護な育て方をしてきた。最近、学習のことで過干渉ぎみになり、厳しく当たることが多くなった。

○ 対人関係

- ・ 友人関係は、他学級の特定の友人に限られ、数は少ない。
- ・ 小学校時代の遊びの特徴-近所の子供達とは遊ばず室内に一人でいることが多かった。

○ 本人の性格

- ・ 神経質, き帳面, 劣等感を持ちやすい

(3) 教科担任の話から

- ・ 授業中にぼんやりしていることがあり、学習成果も思わしくない。特に、体育の実技に対する意欲に欠けている。
- ・ 体育や特別教室などへの移動にも遅れがちである。

5. 予測診断 (診断)

幼少時から虚弱な体質だったため、過保護な養育を受けて、神経質で忍耐力に乏しく、おく病な性格になった。そのため、友人関係や集団の活動について行けず、孤立がちになり、行動がスローになっていった。学業面では意欲がなく、劣等感が強い。また、現在も身体は丈夫とは言えない。

一方、最近、進路の問題もあり、母親が厳しくしっ責しがちである。現時点では、学習面以外は両親との関係が安定しているため、問題行動は顕在化していないが、もし適切な指導援助がなされないならば、「不登校」に陥るものと予測される。